

<b>Title</b>	日本のブックスタート事業、これまでの軌跡そしてこれからの展望：ブックスタート事業のボランティア活動を通して
<b>Author</b>	野村, 公子
<b>Citation</b>	情報学. 10 巻 2 号
<b>Issue Date</b>	2013
<b>ISSN</b>	1349-4511
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学創造都市研究科情報学専攻
<b>Description</b>	北克一教授退官記念特集号
<b>DOI</b>	

Placed on: Osaka City University

# 日本のブックスタート事業、これまでの軌跡そしてこれからの展望 —ブックスタート事業のボランティア活動を通して—

野村 公子<sup>†</sup>

NOMURA Kimiko

**概要** 1992年イギリスのブックトラスト（教育基金団体）が中心となりバーミンガムで“Share books with your baby!”（赤ちゃんの絵本を介して楽しいひとときを分かちあおう）をキャッチフレーズに始まったブックスタート事業。日本では、2000年「子ども読書年」でイギリスの運動が紹介されたことをきっかけに、特定非営利活動法人ブックスタートによって全国的な広がりとなった。ここでは実施から10余年経った日本でのブックスタート事業の今とこれからの展望を考察したい。

## 1 これまでの実施状況

日本でのブックスタート事業は2001年4月に12市町村が実施を始め全国的に広がった。2012年11月30日現在では全国で832市区町村の自治体が実施している。<sup>1)</sup>

大阪市は、事業を始める前に大阪府ではブックスタートの先進地である豊中市の4ヵ月検診の視察を行いその模様を調査した。そこでは「えほんはじめまして」のコーナー設置や活動記録ノートの作成、検診担当者との反省会を持つなど、連絡を密に取り組む様子が参考になったようだ。豊中市の乳幼児健診時の「えほんはじめまして」のコーナーには赤ちゃんが寝転がってくつろげるようマットが敷かれてあり、ソファにキルティングの布がかけられ、ぬいぐるみが置かれてあり、検診時に親子が疲れないように工夫されていた。

そして(1)ブックスタート事業に対する図書館の姿勢について共通認識を持つこと。(2)乳幼児絵本について、絵本の効用や選び方について知ること。(3)検診等についての保健センターの考え方について理解することなどを課題に持ち、乳幼児に関してのエキスパート、絵本研究家、NPOブックスタート支援センターや図書館を主体としたブックスタートに取り組んでいる地域の代表者を招いて講演、研修会を開催し、それら勉強会や研修会を何度も重ね、大阪府で2003年7月にブックスタート事業が始まった。

<sup>†</sup> 東大阪市役所

## 2 ブックスタートの理念と広がり

イギリスでは、子どもが育つ環境を豊かにする運動であると捉えられており、乳幼児保健の専門家などが関わり、社会的に広い支援を受け入れる運動として発展してきた。

日本に紹介されてからのブックスタートの目的は、地域に生まれた全ての赤ちゃんとその保護者が対象で、赤ちゃんとその保護者が絵本を介して親子が楽しく語り合う時間をもつことを応援する運動として進められてきた。

市区町村単位の取り組みで、図書館や保健センター（保健師、栄養士）、地域の子育て支援センター、そしてボランティアとの連携で取り組まれている。

大阪市では議員からの声で進められてきた。主に子ども青少年局を中心に活動が進められている。地域によっては健康推進課、地域教育課、子育て政策課、民生部健康福祉事業室、教育委員会、社会教育課、図書館が中心になり事業を進めているように行政により担当課は様々である。そして行政ではこれまで縦割り方式で事業を行ってきたのだが、この事業においては横のつながりをもって各担当課の連携を成功させている。

2005年当時、筆者が住んでいる東大阪市の健康福祉局健康課子ども家庭室に問い合わせたが、ブックスタートはやっていない、予定もないとの答えだったが、7年経った今ブックスタートを始める方向に向かっていると聞き2013年度からの始まりが待ち遠しい。

### 3 子どもに絵本を届ける2つの方法

筆者がボランティアをしている大阪市立中央図書館分館の鶴見図書館では、これまで2つの方法で子どもたちに絵本が配られている。全国的にみてもこの2つが主流だと考えられる。

1つめの方法は、大阪市でブックスタートが始まった2003年度当初から2009年度まで行われていた赤ちゃんの3ヶ月検診時にブックスタートを行う方法である。他の市区町村では4ヶ月検診、1年6ヶ月検診などの検診時、検診が行われる保健センターなどと組み合わせて行われる事業形態である。実施地域に生まれた全ての赤ちゃんが対象になるので、ブックスタートの理念や子どもの権利条約でもうたわれている『すべての子どもに平等の権利』が与えられることになる。ただし、検診や保健師の話と平行してブックスタートの話が図書館司書によって行われることから、時間制限があり、また検診でたくさんのお話を一度に聞かなければいけないので親子とも疲れがある。一人一人の赤ちゃんに絵本を読んで、子育てに役立つ方法をお話しても全部の赤ちゃんにいきわたらない点で少し物足りなさを感じた。しかし全ての赤ちゃんに絵本のプレゼントをするには最善の方法であると確信している。

2つめの方法として、大阪市では2010年度から子育て支援センターやつどいの広場（子ども・子育てプラザ）でブックスタート事業を開始した。鶴見区内では3カ所（2012年9月からは4カ所）で行われている。3ヶ月検診時に絵本引き換え券を渡し、自分が行きたい施設に直接電話をして予約をし、その子育て支援施設に出向いて絵本のスタートパックを受け取ったあと、図書館司書の説明を受ける。1回で10組～15組までの親子の予約を受けている。図書館司書はブックスタートの意義や絵本が赤ちゃんに与える影響などを話し、交代でボランティアが絵本を読んであげるというシステムになっている。30分の時間のなかで自己紹介をして赤ちゃんを介して親同士のコミュニケーションを図ったり、子育て支援センターの利用方法を説明して施設の利用を促したりと有意義な時間を過ごさせている。

事業の方法が変わるとき、筆者は保健センターでは9割を越す赤ちゃんに絵本が配られるのに対して、子育て支援センター他での受け取りは、わざわざ出向いて行かなければいけない分間がかかるためかなり落ち込むのではないかと危惧していた。実際に始めると3割にまで減り、各所の広報活動や実施施設を増やすことにより、5割くらいまで増えてきた現状だ。今では徐々に制度が浸透し、施設によっては2回に分けて行うようになってきたが、もう少し利用率をあげるには更なる工夫と広報が必要だろう。

### 4 保健センターでのボランティア

筆者が大阪市立中央図書館での研修を経てボランティアに加わったのは2009年3月のことである。大阪市内のどの図書館でボランティアをするかは自分で選べるので、住居に近く月曜日に実施されている鶴見区に決めた。大阪市内の中でも若い世帯の多いところで子どもの数も比較的多い。

鶴見区役所の中に保健センターがあり、検診の始まる30分くらい前から図書館ボランティア2～3人がブックスタートパックの袋詰め作業をする。スタートパックの中身は、保健センターから予防接種に関することや赤ちゃんの生活に役立つ情報、子育て支援センターからのお知らせ、赤ちゃんのおすすめ絵本リスト、図書館の利用者カードの申込書が絵本と一緒に入っている。当時は「ぴよーん」が配られていた。絵本は兄弟姉妹と重ならないように毎年変えられる。その4月からは「がたんごとんがたんごとん」に変わった。

すぐ隣にある鶴見図書館から図書館司書がブックトラックに絵本を乗せてくる。検診に来た親子は、保健師、栄養士、図書館司書のお話を順番に聞いてから検診を受けるのだが、待ち時間があるのでその間に絵本を積んだブックトラックを部屋の中に入れて司書も入れ3～4人で分担して赤ちゃん一人一人に絵本を読んで聞かせる。赤ちゃんの反応は様々で絵本をじーっと見ている子、読んでいる人の口元ばかりを見ている子、他の赤ちゃんに気をとられていたり無反応な子などは親が申し訳なさそうにしているが、赤ちゃんにも個人差があるので他の子と比べたり焦ったりする必要のないことを付け加えるようにしていた。

保健センターでは月1回の検診で50組から70組までの親子が対象になったので司書の説明は2〜3回に分けて行われた。絵本を読むのも説明会場の部屋を移動したり、待合室で検診の順番を待っている時に行ったりと忙しかった。

これまででいちばん印象に残っているのは動物の絵本を読んでいる時、ふくろうが出てきたので「ホー、ホー」と鳴き真似をすると「ホー、ホー」と真似をしてきた子がいた。たった3ヵ月で聞いたものの真似をできるとは、赤ちゃんの能力は無限大だと驚いた。それは稀なケースだが、赤ちゃんだけではなく絵本を読む前と後では保護者の表情は格段に変わっていることが多い。「赤ちゃんに絵本読んでみましょうか？」と声かけをすると、半信半疑で「こんな小さな子にわかるの？」という表情だったのが、反応が大きかった子でも小さかった子でも絵本に対する意識が変わったのが見てとれる。にっこり笑顔になった瞬間にこの子は家でも絵本を読んでもらえると確信する。家に持って帰った絵本を読んでもらいたいので、赤ちゃんだけでなく保護者の表情もよく見て不安にならないよう気を配っていた。

絵本を読んだあとは家に帰ったあとでも思い出してもらえるように一言話をして終える。

- ・赤ちゃんには色のはっきりした絵本を選んで見せると興味を示し、形の認識をします。
- ・お母さんが読むのとお父さんが読むのとでは反応が違うので試してみてください。
- ・絵本の短い言葉を何回も繰り返すと言葉を覚えていきます。
- ・お気に入りの一冊が見つかったと何回も絵本を持ってきて読んでほしいとせがまれますが面倒くさがらずに読んであげてください。
- ・お父さん、お母さんの優しい声を聞くと赤ちゃんが安心するのでたくさん話しかけてください。
- ・赤ちゃんのからだを動かしながら読むと違った絵本の使い方ができます。
- ・図書館へ行ってたくさん絵本を読んであげて気に行ったものを買ってみてください。

何パターンか考えて隣の人とかぶらないように声かけをしていった。ボランティアが絵本を読んでもあげる役ではなく、持って帰った絵本を家の人に読んでもらえるように願いを込めておこなった。

## 5 子育て支援センターでのボランティア

折りしも2009年夏に新型インフルエンザが猛威をふるい検診に来た親子が保健センターで小さな部屋に長くとどまることができなくなり、ブックスタート開催のあり方が再検討され、子育て支援センター他の施設で絵本を配るようになった。2010年度から事業内容が変わり、今の方法に変わってからはボランティアの内容も変わっていった。

これまで一人一人の赤ちゃんと同じ向きで絵本を読んであげていたが、そこではみんなの前でおはなし会形式でブックスタートが行われる。



最初に図書館司書からブックスタート事業のあらましと絵本の使いかたについて話がされ、ブックスタートパックの中身についての説明と子育て支援施設の使い方や登録の仕方、移動図書館と毎月行われる乳幼児向けのお話会のお知らせなどのあとに絵本を読む。

10組から15組までの親子に1つの部屋か室内の1ヵ所に集まってもらい、その前で絵本を読むことになる。本年度配られているのは「じゃあじゃあびりびり」で、この絵本は厚紙でできており「これは〇〇ちゃんの絵本です」と名前が入れるようになっている。兄弟姉妹がいて家にすでにこの絵本があることも想定され他に3冊の絵本が用意されているが、今まで1組だけ4冊全部持っているという親子がおり、嬉しいことだが困ってしまい2冊目の絵本を持って帰ってもらったことがある。

図書館からは司書がその日に読む絵本を数冊持ってくる。その施設にない絵本や大型絵本を持ってきて30分間楽しめるような工夫をしている。

司書とボランティア 1～2 名で構成されているが、時にはそこで保育を行っている保育士が入って手遊びをしたり、育児の相談ができることをお知らせしたりする。

ボランティアは施設にある絵本を読んだり自分の好きな絵本を家から持ってきて親子の前で読んでみる。筆者は自分が育児をしている期間絵本を子どもに読み聞かせすることによって心にゆとりを持てることができ、出かける時に絵本を持っていくことで子どもがたいくつしないよう工夫したことなど育児を楽しくできた経験談を最初に話し、絵本が育児に役立つことを伝えたいためにボランティアを始めたことを説明する。実際に自分の子どもが気に入って何度も読み返した絵本を紹介し、また、自分が良いと思った絵本と子どもが好む絵本が違うことを伝え、しっかり子育てに役立ててもらえるよう話をしている。



子育て支援センター他ではゆったりブックスタートを楽しんでもらえるよう 10 組～15 組までの参加で区切り、定員を超える場合は 2 部に分けて行っている。最近土曜日の回では父親の参加が増え、使っている部屋がぎゅうぎゅう詰めになってしまうほどであるが、父親の育児参加は喜ばしいことなので少しでもゆとりをもって聞いてもらえるよう部屋の使い方を工夫している。自己紹介をして交流を図ることから、子ども同士のつながりや親が悩みを話せる場所となり、情報交換もできその施設の利用にもつながっている。子育て支援施設では子どもが楽しめる絵本が見やすいように並べられたり、授乳室を設けるなど利用しやすいよう改善が重ねられ地域で子育てを応援している。



保健センターでのブックスタートは検診を受けながら忙しい中で行われていたものではあるが、赤ちゃんひとりひとりの顔を見ながら絵本を手渡すことができたことによる達成感があつた。子育て支援施設での絵本の受け取りは、住居近くの施設でブックスタートの説明を受けることができ、保護者の負担が減ったことやゆとりを持てる方法ではないかと思うが、絵本の受け取り率は極端に下がってしまった。2 つの方法を経験してみて、どちらがブックスタートにとってふさわしいのか考えてみると、どちらも一長一短補う点がたくさんあり、より有効な方法とまでは言い難い。

## 6 ブックスタート事業の方法

実施する行政によってブックスタートの方法は様々である。絵本の引換券を送付し、保健センター（保健所など乳幼児健診の行われる場所）、子育て支援センター、公・市立保育所、図書館での受け取りとなり、検診を分けているところもある。

行政単位で行われる事業は子どもや乳幼児に関わるものがたくさんあるが、どれも単独の機関で行われることが多く、ブックスタートのように様々な機関や人が関わることのできる事業形態は珍しい。どの市区町村においてもこの事業を行うためには、行政内での横の連携が不可欠となる。また、関係機関やボランティアなども連携して行うのが一般的なので強いつながりと信頼感が必要である。ブックスタートを行うことの意義や意識を持っていなければ信頼感は生まれないのでさまざまな立場の人が同じ目線にたてるよう研修会やワークショップで学習会を行い共通認識を保てるよう工夫が必要である。

事業に関わるすべての人が共通認識を持って関わっていけば相互に連携していくこともスムーズになってくる。

この事業で一番強いつながりを持つ連携は図書館と保健センターで、検診時に行う場合図書館司書と保健師や栄養士が時間配分をして赤ちゃんの生活に必要な話をする。図書館司書はブックスタートの説明をし、実際に赤ちゃんに絵本を読んであげる。赤ちゃん一人ずつでもよいし、数人の前で読んであげることもある。ボランティアをする人が臨機応変に対応し、検診に来ている赤ちゃんを保護者に負担にならないようにする。あくまでもブックスタートは、絵本を家に持ち帰って保護者自身が子どもに読み聞かせることを目的としている。

これまで図書館では事業としておはなし会やストーリーテリングなどを行ってきた。ほとんどが2,3歳から就学前の児童を対象としており乳幼児が来ることはほとんどなかったが、ブックスタートを始めて以降は少しずつ増えてきており、反響があったので新たに『あかちゃんと楽しむ時間』を月1回設けるまでになった。また、図書館にある絵本コーナーに小さな赤ちゃんを連れて来館する人も確実に増えている。

おはなし会とブックスタートとの違いは、ブックスタートでは保護者が絵本に関心があるなしに関わらず赤ちゃんに絵本が届けられるという点にある。図書や絵本に関心のある親を持つ子どもはおはなし会やストーリーテリングに連れて行ってもらえるが、そうでない親を持つ子どもは図書と出会う時期が遅くなってしまう。その点ブックスタートでは対象となるすべての赤ちゃんに絵本を配ろうとする事業なので、そのような場に参加する機会がなかった子ども達も絵本を手にすることができる点でおはなし会とは大きく異なる。

むしろそのような機会に恵まれない環境の子どもたちにこそ絵本を手渡したいと考える。

## 7 絵本がつなぐ育児と子どもへの影響

多くのマスメディアで絵本が赤ちゃんに与える良い影響などが紹介されているが、絵本が子どもに影響を及ぼす大きな要因を探してみよう。

絵本の読み聞かせは胎教でお腹の中にいる時か

ら始める人もいる。この頃の赤ちゃんは言語を理解するというより、心地よい音楽と同じように母親の声を聞いて自分の身近な人の声を認識し、安心するという効果があるようだ。

誕生してからの赤ちゃんはだんだん目がよく見えるようになり、耳がよく聞こえるようになってくる。その時期に色のはっきりしたものを見せたり、同じ言葉を繰り返すことによっていろいろなものを覚えていく。特に絵本に出てくるような短くて単純な言葉は乳幼児には心地よいリズムとして受け入れられる。人間が言葉を覚える仕組みは、脳の前頭連合野に耳から得た情報が刺激となって伝えられ言葉を覚えていくというものである。絵本を何度も繰り返して読むことによって言葉が認識され、他のものと組み合わせられて文章となっていくのである。赤ちゃんは、まだしゃべれなくてもいろいろな経験が記憶に残っていくのだ。

「絵本は心のミルクです」という人もいるように、絵本を読み聞かせることで心の栄養になっていく。身近な人の雰囲気や感情に敏感に感じ取る乳幼児はちょっとした気持ちの変化で不安になったり安心したりする。お父さんお母さんが語りかけたり笑いかけることによって赤ちゃんは安心し、その笑顔を見ることによって気持ちにゆとりができ笑顔のキャッチボールができる。ブックスタートは絵本を挟んで赤ちゃんに向き合いことばと心を育みながらかけがえのない時間を過ごすきっかけづくりになっている。

## 8 これからの展望

絵本が子どもの成長や親子関係に重要な役割を持つことはこれまでも書いてきた。この事業が広がってきて赤ちゃんに与える影響が良いものであるとわかるほどにこの事業への期待は高まってきている。親子で図書館を訪れる人が増えその子ども自身が成長した時、図書館に足を運んでもらえることを期待している。

本場英国のブックスタートは、今では小学校就学前までに3度絵本配布の機会がある<sup>2)</sup>。他に絵本を割り引きで買える券ももらえるようになっている。世界的な不況のため財政難を理由に一時は打ちきりの方向になりかけたが手法を替えて継続している実態がある。

日本でブックスタートが始まった 2001 年から 2004 年までの間に事業を行う市区町村が 650 まで増えた。その後は市町村合併が進み自治体の数が減ったが、ブックスタートを実施する自治体の数は若干ではあるが増え続けている。それでも 2012 年 11 月 30 日現在で 1742 の自治体に対し 48% の 832 市区町村の実施にとどまっている。半数近くまで増えたと読むか、まだ半数にも届かないと読むかで議論が分かれるところだろう。筆者はやつと半数近くまで増えたが、まだまだ浸透したとまでは言えないと思っている。

これからブックスタートが普通にどこでも行われる事業にするには市民運動をもっと広げてゆき、実際にブックスタート事業に関わっている人達によってその良さを伝えることが必要だと考える。

すべての赤ちゃんに絵本を届けられる日が近い将来訪れることを熱望する。

## 謝辞

ブックスタートとの出会いは、大阪市立大学大学院創造都市研究科に在籍していた時、図書館情報システム論の授業で実際の図書館を使っての研究発表でした。大阪市立中央図書館で行っている事業の中にブックスタートがあり、まっ先に飛びつき調査、学習し発表したことを覚えています。

社会人を経験してから大学院に進むことはとても勇気のいることでしたが、教えてくださる先生に恵まれ、一緒に学んだ学友にも恵まれ 2 年間ほんとうに楽しく勉強できました。その中で人と接することの優しさを学び、図書を通じて人生を豊かにすることも学びました。大学生活を振り返り必死で学習したことを思い出すと感慨深いものがあります。

その大学院に導いてくださった恩師である北克一教授に深く感謝いたします。

北先生が図書と人を結びつけてこられたように、私も絵本と赤ちゃんを結びつけ、家族やその周りの人たちと優しく関わられるよう、社会生活を豊かに過ごせるようこれからも活動を続けていきたいと思ひます。

## 注

- 1) NPO ブックスタートホームページ  
<http://www.bookstart.net/> [確認: 2012-12-20]
- 2) ブックスタート事業の拡大 (英国)  
<http://current.ndl.go.jp/e480> [確認: 2012-11-20]

## [参考文献]

1. 「大阪市立図書館と他施設との連携による子ども読書活動推進事業」実施報告書—平成16年度—市町村等における子どもの読書活動推進に関する調査研究 大阪市立図書館と他施設との連携による子ども読書活動推進検討委員会/編 2005. 2
2. ブックスタート・ハンドブック 第6版 NPO ブックスタート/編 2012. 3
3. 赤ちゃんと絵本をひらいたら ブックスタートはじまりの10年 NPO ブックスタート/編著 2010. 2